

## 魔法の言葉

2024. 8. 23

子どもたちを前にする仕事をしていると、“魔法の言葉”を言ってみたくなる。ところが、これがうまくいかない。ねらって言えるものではない。格好をつけた言葉を並べたからといって、それが魔法の言葉となるかという、そうでもない。魔法の言葉は、いくつかの条件がそろわないと、同じ言葉を発したとしても、それが魔法になることはない。

もう何年も前のことになる。まだ娘が中学生のときだった。ソフトテニスの大会で、顧問の先生の代わりにベンチに入っていた。ソフトテニスでは、生徒が審判をすることが多い。ソフトテニスの団体戦は、2人組のダブルスを3対戦行って勝敗を決める。いわゆるレギュラーは6人である。しかし、登録メンバーは8名である。8人の中から6人が試合に出ることになる。そうすると、試合に出ない2人が審判をするケースが多くなる。

その試合でも、相手の学校の試合に出ない選手が審判をしていた。その選手の審判が実に見事だった。ベンチに入っていた私は、試合が終わってからその選手に声をかけ、その審判ぶりをほめた。実は、きちんと審判ができる選手は、そう多くはない。その選手は際立っていた。私は、本当にすばらしかったため、本気でほめた。

私にほめられた選手は、うれしくて顧問の先生に報告した。その選手は、一生懸命努力しているが、なかなかレギュラーにはなれない。そのことで、落ち込むこともあった。それでも、やるべきことはきちんとやる素直でまじめな生徒だった。顧問の先生も、その生徒の努力を認め、いつも励ましていた。

そんなときに、私が絶妙のタイミングで彼女に声をかけたらしかった。自分の努力が認められたと思うてくれたのだろう。その後、彼女の人生は変わった。このエピソードをもとに作文を書いた。すると、コンクールで入賞した。

ある会で、声をかけられた。「失礼ですが、〇〇中学校のテニス部の顧問の先生ですよね。私、テニスコートで何度かお会いしているんです」少し話をして、すぐに状況が理解できた。その先生は、私がほめた選手の先生だった。彼女をいつも励ましていた顧問の先生だった。事の経緯を、その先生から教えていただいた。その先生は、私に手紙をしたためようかと思ったそうである。

彼女にかけた言葉が、魔法の言葉だったかどうかはわからない。だが、こんなふうにして、魔法の言葉が生まれることを知った。彼女と、顧問の先生に感謝するばかりである。